

## 防げるか?ドライバーの突然異常行動

### 事業用自動車、年間135件の健康起因事故

今年2月、大阪・梅田の繁華街で乗用車が暴走し、歩道に突っ込み11人が死傷した。死亡した運転手は心疾患を発症したと見られている。先月も神戸で車が暴走し歩行者5人が重軽傷を負ったが、近年、乗用車の運転手の健康に起因して死傷する事故が相次いでいる。実は事業用自動車による健康に起因する事故も発生している。国土交通省に報告された事業用自動車の事故件数5573件のうち、健康に起因する事故は135件、率にして6・7%発生している(平成25年)。2・7日に1回発生数の計算だ。

### 「点呼時の血圧測定必要」と専門家

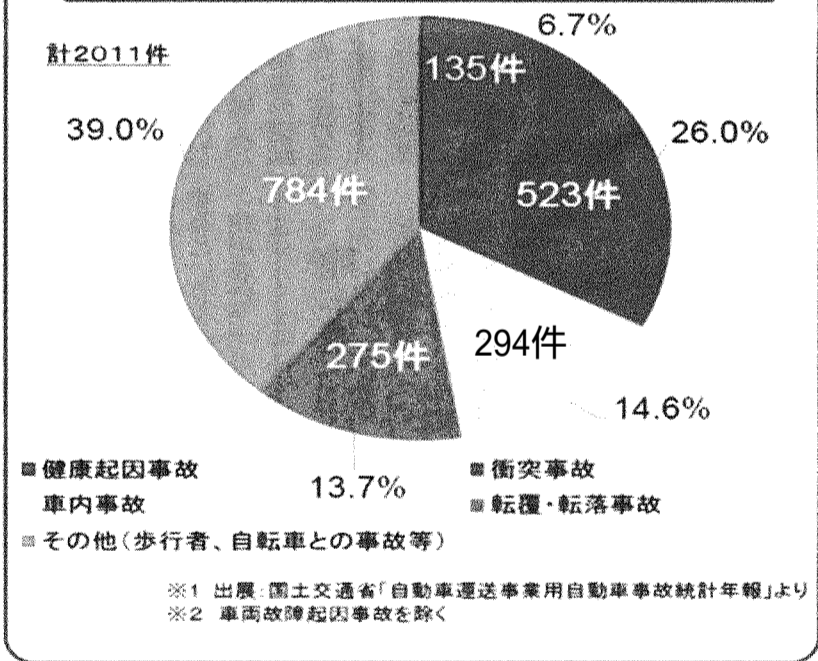
今年4月、関西のある運送会社で50歳後半の運転手が運転するトラックが民家に突っ込んだ。幸い被害者は出なかったが、運転手は心疾患で死亡。社長によると運転手は点呼時は元気になっていた。

表立ってないだけで事業用自動車の健康起因による死亡事故は発生している。国交省「自動車運送事業用自動車事故統計年報」によると、事業用自動車の健康起因事故(平成25年)は135件発生。うち死亡事故は35件あった。35件の内訳はバス5

今年4月、関西のある運送会社で50歳後半の運転手が運転するトラックが民家に突っ込んだ。幸い被害者は出なかったが、運転手は心疾患で死亡。社長によると運転手は点呼時は元気になっていた。

表立ってないだけで事業用自動車の健康起因事故

事業用自動車の乗務員起因事故に占める健康起因事故の割合(平成25年)



### 道標

◆トラック運送業界は、慢性的なドライバー不足である。この点を重く見た国交省は、2年ほど前から、女性トラックドライバーを「トラックガール」と名付け、様々な取り組みを進めている。現在、トラックドライバーに占める女性比率はわずか3・8%(約3万人)にとどまっている。しかしながら、現役の女性ドライバーからは、自社や配送先等において女性用トイレが整備されていないといった声が上がっており、女性を雇うことについて、経営者の意識改革や労働環境の整備、業界イメージの改善が求められている。女性運転手は、「ほっとして運転していた」と説明した。安全運転を徹底させることが、喫緊の課題としてクロースアップされて来た。5月3日のことだ。山口県下松市の山陽自動車道下り線で多重衝突事故が起き、この事故で3人が死亡し、3人が重傷、男女3人が軽傷を負うという重大事故が起きた。この事故は、54歳になる女性運転手が、事故発着していた最後尾に、猛スピードで突っ込んだというものである。翌日、この女性運転手は、自動車

トランプでは人間ドックの実施率は16%、睡眠時無呼吸症候群(SAS)検査は42%、MRI検査は20%以下で、未実施の理由として、会社の費用負担が重かった。トランプでは、運転者が異常を検知した場合にボタンを押す方式のシステムがドライバーの姿勢、視線、ハンド操作を監視し、自ら減速して停止するなどの自動制御を行う。国交省自動車局安全政策課では、「ドライバー異常時対応システム」の導入が期待される。2月の大阪梅田での事故、3月の広島で

健康サポート事業を行うNPO法人ヘルスケアネットワークの作本貞子副理事長は、健康起因によるドライバーの異常行動について、「梅田の事故では運転手が血圧管理を上手に行っていない原因も考えられる。トラックドライバーは不規則な時間、運動不足、食事の偏りなどで、血圧の高い人が多く、『有所見』の割合は他の業界に比べ10%高い。高血圧が脳・心臓疾患、また、SASを招き、生活習慣病が積み重なって血圧が高くなる。健康状態は実際は、わかっていないことが多い。なので、できるなら点呼時の血圧測定をやって頂きたい。健康診断して、チェックして修正して生活習慣病を治し、生活のコントロール、血圧管理を行うのも運行管理者の役目とも言える」と話している。